

ドラえもん のび太のバ
イオハザード ~
Resistance to despair
~

吉田功補

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある夏の日、のび太達はドラえもんにバカンスへ連れて行つてもらい、楽しい日々を
過ごしていた。

しかしそれも終わり、みんなは帰つてきて家への帰路を辿つて行つた。
だが、もうこの町は何かが、いや、全てが変わっていた……

(タイトルのResistance to despairとは絶望への抵抗という意
味です)

目 次

序 章 始まり～B E G I N S～

prologue 全ての始まりと日

常の終わり

第1章 異変～ACCIDENT～

第1話 感染者

5

第2話 追跡者、行動開始。

12

序 章 始まり～B E G I N S～

prologue 全ての始まりと日常の終わり

2019年のある夏の日はい、僕たちはドラえもんにバカンスへ連れて行つてもら
い、楽しい日々を過ごしました。

のび太（以降の）「ああー楽しかつたあ！ ありがとうドラえもん」

ドラえもん（以降ド）「良いよそんなこと！ また行きたかつたらいつでも言つて！」

静香（以降静）「本当に楽しかつたわね♪ でも親と会えないのは寂しかつたし、久しぶ
りに顔が見れるのが嬉しいわ！」

ジャイアン（以降ジ）「肉美味かつたなあ～！」

スネ夫（以降ス）「本当ジャイアンは食べ物の事しか考えてないなあ（小声）」

ジ「おいスネ夫！ なんか言つたか？」

ス「い、いやいや、何にも言つてないよ。ハハ：」

ド「それより皆、早く家に帰つたら？ きっと親も寂しがつてるよ？」

静「そうね～じや皆んなさよなら！」

一同「さよなら！」

みんなとちよつとした会話を終えたのが太は、家への帰路に着いた。

「ん？あれ、誰だろう？」

のが太が見たのは、白い車に乗った金髪の、こちら辺では見かけない人物だった。の「外国人…かな？なんか困ってるみたいだけど、一応話しかけてみるか。」

のが太は、その外国人に声を掛けた。

の「す、すみません。どうしました？」

？「ん、君は誰だい？」

その外国人に話しかけたのが太は、日本語が通じたことに安心した。

の「あ、日本語が話せるんですね！よかつたあ！」

の「あ、そうだ！どうしたんですか？困つてるみたいですけど。」

？「ああ、君、この辺で変な奴を見かけなかつたか？」

の「不審者ですか？見てないですけど…」

？「なら良かつた。気をつけたほうがいい。変な奴がいると言う通報を受けて來たんだが、大丈夫みたいだね。」

？「気をつけるんだぞ、まだいるかも知れないからな。」

の「通報、つて事は、お兄さんは警察官なんですか？」

？「警察官…とはちよつと違うな。あと、お兄さんって言うのはなんか変な感じがす

るからやめてくれ。」

レオン（以下レ）「俺の名前はレオン・S・ケネディだ！ レオンでいい。」
の「分かりました！ レオンさん。」

レ「まあ、とにかく気をつけといてくれ。」

のび太とレオンの間にそんな話がされ、のび太は再び帰路に着いた。
のび太は家に着いた。

しかし、先程から違和感を感じていた。

静か、いや、静かすぎるのだ。

のび太は家に入つたが、やはり嫌な静けさが漂つている。

の「ママ？ いるんでしょー？ お腹空いたー！」

その呼び声は、静けさにかき消されるように無くなつた。

反応が無い。買い物に行つたのだろうか？

そんな疑問がよぎる。

の「ママー！ いるんでしょー！ 収事してよー！」

しかし反応は無い。

ガチャン！

の「ウワツ、びっくりしたあ。」

なにかが落ちた音が響き、一瞬驚くも、落ち着きを取り戻す。の「やっぱりママいるんじやないか！なんで返事してくれないのさ！」そう言つて台所に立ち入る。

しかし、そこでのび太が目にしたのは…

prologue 全ての始まりと日常の終わり 終
次回へ続く。

第1章 異変～ACCIDENT～

第1話 感染者

の「やつぱりママいるんじやないかー！なんで返事してくれないのさ!?」
そう言つて台所に入る。

しかし、そこで目にしたのは……

の「マ、ママ？どうしたの？気分でも悪いの？」
うつむいたまま動いているママの姿だつた。
の「ね、ねえつてば！」

ママ（？）「クチャツクチャツ……」

なにかを咀嚼するような音を立てながら動いている。
のび太はここであることに気付く。

パパがいないのだ。

今日は仕事が休みのはずなのに、なぜいなか。の
その理由は、すぐに分かつた。

ママ（？）「グツチャグチャ……ブチイイツ!!」

の「ひ、ひいつ！」

ママが今まで咀嚼していたのは、パパそのものなのだ。
しかし、すでにそれはほぼただの肉塊だ。

そして、ブチという音は、ママがパパの首を噛み千切り、
頭部が首から切断されて落ちたのだ。

それは頭部というよりは生の頭蓋骨に近く、顔は3分の2ほど
肉が欠損している。

目があつた部分は、ただの空洞と化している。

の「な、何なんだよ！ 一体何が!?」

ママ、いやママだつたなにかがこちらに気付く。

ママ（？）「グウ……グウアア!!」

の「ウワアア！ 来るな!!」

のび太は瞬発的に包丁を取り、襲つて来たソレに向かた。
そして

ママ（？）「ア、ア、ア、！」

の「やめろ！こつちに来るなあああ!!!」

刃をソレに突き刺す。

包丁はソレの頭部に刺さり、ソレは倒れる。

の「はあ、はあ、どうしよう、ママを殺しちゃつた……」

その時

ガシャーーン！

ガラスが割れた音が和室から聞こえた。

の「そ、そんなまさか!?」

悪い予感が的中する。

もう一体、かつて人であつた何かが家に入つて來た。

のび太は、ママであつた何かに刺さつてゐる包丁を抜いて、再び構える。

しかし、先程割れた窓から、もう一体奴らが入つてきた。

幸いすぐ近くに勝手口があつたため、そこから外に脱出出來た。

しかし、見慣れたはずの光景は、其処には無かつた。

あるのは、漂う死臭に倒れる死体。どれも皆、肉を食いちぎられている。
そして、壁や家に突つ込んだり、ひっくり返つたりしている壊れた車。
何より、其処ら中にいる▣奴ら▣
死体に食いついているのがいれば、
ただ徘徊しているもの。

足や下半身がなく這いずつているものや
生きている人間を襲つているものもいる。
の「何なんだこれ、どうなつてるんだよお!?」

警 「危ない、伏せろ！」

の「えつ、はい！」

しゃがむのび太。それと同時に聞こえる銃声。

警 「君、大丈夫か!? 怪我は?」

の「大丈夫です！それより、一体なにが起こってるんですか?!」

警 「分からぬ。だが、有り得ないことが起きているのは事実だ。」

警 「そんなことより、ここを離れるぞ！ 奴らが今の銃声におびき寄せられている！」

2人は其処を走つて離れる。

そして、大きめの警察署についた。

警 「ここなら多分安全だ。取り敢えず、君にこれを渡しておく。」

そう言つて渡されたのは、H & K V P 70という大型拳銃と9mmパラベラム弾薬60発だった。
〔IMG50530〕
の「こ、これつて：本物の拳銃だ！」

警 「ああ、もしもの時用に渡しておく。俺が奴らみたいになつたら、
それで殺してくれ。」
の「で、出来ないよ！ そんなこと！」

警 「いいか、少年。男にはな、覚悟を決める時が必ず来るんだ。別れだつてそうだ。
人間誰しもが必ずその時を迎える。嫌でもな。だから、強くなれ。強くなるんだ！」

の「分かり…ました。」

バリバリバリツ

木の板が折れるような音が響く。

それと同時に、呻き声のようなものが聞こえ出す。

「オ、オ、オ、ア、ア、!!」

警 「まずい、奴らが入ってきた！バリケードが破られたのか！」

警 「逃げろ！少年！君はまだ若い！こんなところで死なせる訳にいかない！」

の「でも！あなたは⁈？」

警 「俺は大丈夫だ！それに俺は警官、警察署で死ねるなら本望さ！だから行けええー！」

の「絶対に死んじやダメですかねー!!!」

警 「心配するな！ いつかまた何処かで！」

の「(ごめんなさい……)」

のび太は警官が時間稼ぎをしている間に警察署を離れた。
のび太が彼の声を聞いたのは、これが最後になつた。

のび太が後ろを向くと、そのタイミングで窓に血飛沫が飛び散つた。
それが彼のものか奴らのものかは分から無かつたが、のび太は
奴らのものだと信じた。

彼のものとは思いたくなかったからだ。

そしてのび太は警官から渡された拳銃をその時受け取ったホルダーに入れ、
みんなが居るであろう学校に歩みを進めた……

To be continued…

第2話

追跡者、行動開始。

のび太は警察署から無事脱出し、学校へと歩みを進める。

途中、何体かと遭遇したが、警官に託されたハンドガンで難を逃れた。
そしてのび太は学校に到着した。

のび太は、ここにみんなが居ると信じていた。
の「(頼む……みんな無事でいて!)」

しかし、ここで問題が生じた。

の「入口が、椅子や机で塞がれてる……」

の「けど、これが作られてるってことは、やつぱり中に人が!」
のび太が他に入れる所が無いか模索していた、その時。

ドオツ

地面が震えた。

一瞬地震かと思つたが、どうやらそうでは無いらしい。

ドオツ

今度はもつと近くで音が。

ドオツ

ドオツ

更に近く。

そして……

の「ウワアツ!!」

背後から強い力が伝わり、吹っ飛ばされて地面に叩きつけられるのび太。

の「イツテテ……今度はな……」

のび太の口の動きが止まる。

目の前にいる馬鹿でかいソレを見て、一瞬思考が止まる。

の「ああ……あ……あつ！」

思考が再び戻り、立ち上がってハンドガンを構える。

そして弾を放つ。

ガキンッ！

弾が弾かれる。

体に纏っている深緑色のコートが、放たれた弾を弾いたのだ。
の「こ、コイツ、弾が通らない！」

の「凄いヤバ そうだし、逃げるしかない！」

のび太はそう考えると同時に足を動かした。

の「（クソー！・走るのは苦手なのに！・けどそんなこと考えてる場合じゃない！）」

無我夢中で走るのび太。

しばらく走つていると、半開きの自動シャツジャーを見つけた。
かなり分厚く、丈夫そうだ。

の「よし！ここから入れる！」

のび太は全力で走つた。

シャツジャーに辿り着いたが、足元の段差につまづいてしまう。
だが、転んだ弾みに体が回転し、そのまま中に転がり込む。
そして、立ち上がり手元のボタンを押す。

半開きだつたシャツターが、だんだん下に下がり、そして完全に閉じる。

の「ふうー、とりあえずなんとかなつた。次はみんなを探さないと！」

気付く。

シャツター部屋を出ようとしたその時、薄暗い部屋の端でなにかが光つていてることに
の「なんだこれ??鍵：かな？」

の「よく見ると、職員室つて書いてあるぞ？つてことは職員室の鍵か！」

職員室には沢山の部屋の鍵があるため、少し無くなつてもある程度の部屋には
入れると考えたのび太は、早速職員室へ向かう。

の「うえつ…ひどいなあ。」

そういうのも仕方は無い。

何せ廊下には血まみれの死体がいくつも横たわっているのだ。

窓が閉まつているため、死臭が立ち込めている。

小学5年生が見るには残酷すぎる状態のモノばかりだ。

の「やつと着いた…」
の「開けてみるか…」

そう言うとのび太はハンドガンを片手に構え、片手で鍵を開ける。
ガチャ…

中は書類が散らばっており、血がついているものもある。
目当てのモノは、幸い机の上にあつた。

の「よし、あつたぞ！」

手に取つた、その時だつた。

ガツシヤアアアアン!!

窓ガラスが割れる音だ。

ガシヤアアン！

もう一度鳴る。

の「ま、またゾンビか!?」

ソレは、人型では無く、四足歩行。
犬だつた何かだ。

ケルベロスA 「ワ、ウ、！ワ、ウ、ワ、ウ、！」

ケルベロスB 「グルルオオオオオオオオオオ！」

の「こ、こりやマズイな…」へへへへ

ケルベロスA B 「「グオオオオオオオオオオオオ！」」

の「う、うあああああ!!!!」

2対同時に襲いかかつてくるケルベロス。
のび太の運命やいかに!?

To be continued…